

論集刊行にあたって For editing and publishing

宮脇 千絵¹
MIYAWAKI Chie

1. はじめに

本論集は、人類学研究所国際化推進事業（第3期）「在地的人類学に向けたアジア人類学者ネットワーク構築」（2015～2017年度）に関連して開催されたシンポジウムや分科会での発表内容をまとめた報告書である。

この事業は、人類社会が直面している諸問題に対して、アジア諸国の人類学者と日本の人類学および民俗学研究者の共同で人類学的貢献の可能性を模索し、発信することで人類学の意義を再確認し、また本研究所の国際的なハブとしてのプレゼンスを高めることを目的とするものであった。

人類社会が直面している問題として本事業では、具体的に災害に焦点を当てた。その素地として、人類学研究所が2012年度にプレ事業を開始し、2013年度より2015年度まで行ってきた共同研究「危機と再生の人類学：土地、記憶、コミュニティ」がある。この研究会は、災害や環境破壊、戦争や疫病など人類が直面している様々な危機に対して、人類がそれらをどのように認識し、また回避してきたのか、回避しようとしているのかを検討するものであったが、その発端は2011年3月11日の東日本大震災の衝撃であった（後藤 2016:1）。この共同研究会の趣旨および成果を踏まえ、災害に対して、人類学がどのように取り組むことができるのかについて議論を引き継いだのが、国際化推進事業である。

2. 国際化推進事業による災害研究への取り組み

1995年に発生した阪神・淡路大震災や2011年の東日本大震災などの大規模災害は、いまだ地域社会や人々の暮らしに大きな影響を与え続けており、人類学やその隣接分野でも多くの災害研究が進められている。人類学における災害研究の特徴として、他の防災研究のように、できるだけ早く研究成果を「社会に実装」ということへの要請をそれほどよく感じてないという点が挙げられる（木村 2014:48）。復興を推し進めるには、個人的な被災の経験や記憶を、一般化、抽象化することが重要になるが、人類学の成果が、定型化され

¹ 南山大学人類学研究所 第一種研究員・人文学部日本文化学科 准教授

にくい、密にローカルな文脈に結びついている、質的な記述であるため、即自的に復興に役立つものではないととらえられるからである（木村 2014:56）。

しかしながら、フィールドワークという方法論を採用することで、一般化、抽象化される際にこぼれ落ちてしまう個人の経験や記憶を丁寧にすくいあげることが可能とする人類学が、災害研究に寄与できる点は大きいだろう。また、人類学における災害研究は、多くの人にとってももとの専門であったわけではないという特徴がある。調査地が被災地になつてはじめて災害研究に向き合う人も多く、そういった意味では、人類学を専門とするわれわれ誰にでも遭遇する、あるいは関わる可能性のある研究だといえる。

これらの点を踏まえ本事業で着目したのは、復興の過程において、集合化され、普遍化・抽象化される（あるいはされるべきと捉えられる）災害にまつわる記憶や経験と、看過されがちな個人的な経験や解釈である。

復興の過程や、その後の災害の伝承を考える際に、災害の記憶や経験といった個人的記憶をいかに集合的記憶に集約させるのかという問題が常につきまとう（e.g. 阪本・木村・松多・松岡・矢守 2009）。災害に遭遇したひとりひとりの経験や、時間を経てからの解釈にはグラデーションがある。例えば、身近な人を亡くした人や、生活の糧や住居を失った人、被災地の中心にあっても人的、物的被害をそれほど受けていない人が経験したことは、決して同じではないだろう。

しかし、災害の経験や記憶を取りまとめ、伝承しようとする過程では、それらを集合化して普遍化、抽象化せざるを得ない。その過程で、どのような取舍選択が働いて記憶や経験が集合化されていくのだろうか。またそれが誰の記憶や経験なのかという当事者性も問題となる。

ここでひとつ例を挙げてみよう。宮城県気仙沼市のリアス・アーク美術館では、2013年4月3日に「東日本大震災の記録と津波の災害史」を常設展示として公開した。震災直後から3人の学芸員が現地を歩いて撮った写真、および収集した被災物を中心に展示が構成されている。この展示で圧巻なのは、被災物とそれに付された「物語」である。学芸員が収集した被災物は、もはや持ち主が不明なものばかりである。そこで、震災後に様々な被災者と語り合う中で得られた物語をベースとして、学芸員が被災物に合わせて創作したのである（リアス・アーク美術館 2015:150-151）。いわば語らぬモノに、フィクションを語らせたというわけである。その狙いとして、次のようなことが述べられている。

特定できない個人を想定し、その個人が「被災物」に宿る記憶を語っているという演出は、被災物を普遍的な存在にすることが目的である。不特定の個人をイメージするためには、自分に身近な誰か、あるいは自分自身を仮想せざるを得ない。それによって当事者性が無意識に生み出されるという効果を狙った手法である（リアス・アーク美術館 2015:150-151）。

リアス・アーク美術館の展示の手法は、あえて、モノの所有者＝特定の個人を不透明

にすることで、誰にでも当事者となれる可能性を開く試みだといえよう。

しかし当事者性の不在に対しては、ポジティブな評価だけではない。阪神・淡路大震災後に神戸市につくられた人と防災未来センターの展示は、議論を巻き起こしている。人と防災未来センターは、入館するとまず4階の震災追体験フロアにあるシアターに誘導される。そしてそこで、迫力ある映像とともに当時の地震の揺れを体験する。その後、被災したある少女の目線からの復興物語の映像が流れる。この少女の物語と同じような経験をした人はいるかもしれないが、しかしそれは誰のものでもない物語である。

この展示に関しては、手厳しい批判がおこなわれている。この展示には、「無名の死者」が鮮明に浮かび上がってくる「演出」が行われており、再現 (representation)、提示 (presentation)、捏造 (fabrication) の3つの手法が用いられている (寺田 2015:84-85)。ナレーションの語りに責任主体がなく、これを最初に強制されることで、他の語りを抑圧する効果をもっている (竹沢 2015:214)、などである。震災を経験した人の数だけある経験や記憶を、ひとつの物語へと集約することについての演出の是非、語りの主体性の有無が問題とされているのである。

ここでは、災害の記憶や経験が、ミュージアム展示として集約されていく際の当事者性について例を挙げたが、この問題はミュージアム展示に留まらない。災害が起き、復興をおこなう過程でこそその意義を発揮する人類学だが、調査をおこなう際、復興の核となる地域やコミュニティの担い手は誰なのか、被災地の復興資源となる手工芸を担う当事者とは誰なのか、という問題を突きつけられる。

そこで本論集では、地域の祭り、手工芸品、災害ミュージアムに焦点を当てて、これを考察する。それぞれの論考が対象とする災害や被災地は、阪神・淡路大震災や東日本大震災にとどまらず、地域としてはインドや台湾、災害としては台風や水害なども含むが、ここに通底するのは、災害復興のプロセスにおいて、災害の記憶や経験がどのように集約、一般化されるのか、そしてそれを誰がどのように担っていくのか、という問題意識である。

それでは、本論集の元となった各企画を開催順に概説しながら、本論集に収められている各論文について紹介をしていこう。

3. 東アジア人類学合宿研究会・分科会「東アジアにおける災害復興と人類学—地域・民俗・記憶—」

この分科会は、さまざまな「復興」のあり方を検討することを通じて、復興の単位とされる、地域、コミュニティ、村とは何をさすのか、また当事者とは誰を指すのかを、復興のシンボルとされる祭や財、知識に焦点を当てて検討することを目的に実施した。報告の詳細は (宮脇 2016a:225-226) を参照のこと。当日のプログラムは以下の通りである。

日時：2015年12月27日(日)、11:00~13:00

場所：南山大学研修センター

プログラム：

趣旨説明 宮脇千絵（南山大学人類学研究所）

発表1 稲澤努（尚絅学院大学）

「無形民俗文化の『復興』とコミュニティ—宮城県山元町の事例から」

発表2 内尾太一（麗澤大学）

「津波と椿：南三陸町における物語復興の事例から」

発表3 山西弘朗（東京外国語大学大学院）

「八八水害復興における境界の顕在化とゆらぎ：台湾高雄市プヌン村落の事例から」

コメント 松岡正子（愛知大学）

この分科会での発表を基に本論集において、稲澤努は、宮城県山元町における東日本大震災後のコミュニティと祭りの「復興過程」の事例を通じて、震災後に氾濫した「つながり」や「絆」言説に対し、祭りの復興や担い手が必ずしも既存の「地区」に基づくわけではなく、そこには内外の人の動きによる新たなコミュニティがみられることを明らかにする。

4. 人類学研究所・公開シンポジウム「手しごとと復興」

このシンポジウムでは、手芸、民芸、工芸といった手しごとが災害に遭遇したとき、いかなる影響を受けるのか。また、長いあいだ受け継がれてきた手しごと、新たに生まれた手しごと、それらを通じて人びとがどのように復興と向き合っているのかを、長期的なスパンで調査・研究・支援をおこなっている立場からの発表により検討をした。報告の詳細は（宮脇 2016b:227-228）を参照のこと。当日のプログラムは次のとおりである。

日時：2016年1月24日（金）、13:00～18:00

場所：南山大学人類学研究所会議室

プログラム：

13:00～13:05 後藤明（南山大学人類学研究所） 挨拶

13:05～13:15 宮脇千絵（南山大学人類学研究所） 趣旨説明

13:20～14:00 金谷美和（国立民族学博物館）

「手工芸生産者の被災と復興—インド西部地震被災地の14年間—」

14:00～14:40 石本めぐみ（NPO Women's Eye 代表）

「女性支援の活動を通して見えてきたこと—被災地と手しごと—」

15:00～15:40 濱田琢司（南山大学人類学研究所）

「震災と民芸／産地」

15:40～16:20 加藤幸治（東北学院大学）

「津波常襲地における工芸技術の断絶と継承—復興過程の民俗調査からみえてくるもの—」

16:40～16:50 サガヤラージ・アントニサーミ（南山大学人類学研究所）

コメント

16:50～17:00 上羽陽子 (国立民族学博物館) コメント

17:00～18:00 総合討論

このときの発表を基に本論集において、金谷美和は、2001年のインド西部地震によって生活基盤を喪失した手工芸生産者の生業復興のプロセスにおいて、染色品「アジュラク」が、復興のシンボルとして機能したことを示し、布の特性が復興の文化的資源化にうまく適合したことを明らかにする。

濱田琢司は、東日本大震災が、益子参考館にとって、ネットワークやコミュニティと結びつく契機となり、「ひらかれた場」となっていた過程を示したうえで、常に動きのある場にとって、震災とは一つの画期をなすものであることを明らかにする。

加藤幸治は、東日本大震災の被災地を津波常襲地として捉え、宮城県石巻市の「雄勝硯」を事例して取り上げ、日本の伝統工芸品が、震災後に復興するさまが注目されるなか、実は長い歴史のなかでは常に創意工夫され変化し、発展してきたことを明らかにする。

5. 人類学研究所・公開講演会「災害ミュージアム×防災地理学」

本研究会は、人類学以外の視点から災害について考えることを目的として、災害の記憶を伝える災害ミュージアム、およびウェブ地図を通じた市民参加型防災活動に関する講師をお招きして開催した。災害ミュージアムが記憶、ウェブ地図が情報を扱っていることから、本研究会では、記憶や情報が誰のもので、誰のために活用されるのか、いかに共有できる/されうるべきなのかという点、あるいは記憶や情報が重層性を持つとしたらどこを拾い上げるのかといった点など、共通する論点が含有されることが示唆された。

報告の詳細は(宮脇 2016c:229-230)を参照のこと。当日のプログラムは次のとおりである。なお発表者の所属は当時のものである。

日時：2016年2月19日(金)、14:00～17:05

場所：南山大学人類学研究所会議室

プログラム：

14:00～14:10 挨拶 後藤明(南山大学人類学研究所)

14:10～15:00 講演1 阪本真由美(名古屋大学減災連携研究センター)

「災害ミュージアムを通じた記憶の想起と継承」

15:00～15:30 質疑応答

15:45～16:35 講演2 西村雄一郎(奈良女子大学)

「市民参加型GISによる災害情報共有の可能性と課題」

16:35～17:05 質疑応答

司会：宮脇千絵(南山大学人類学研究所)

6. 日本文化人類学会第50回研究大会・分科会「災害ミュージアムの役割と可能性」

記憶の伝承、地域住民との協働からー」

この分科会では、災害ミュージアムとは、どのようなものなのか、その役割と可能性について検討をおこなった。この分科会は、防災危機管理、防災教育学、民俗学、博物館学、文化人類学といった諸分野から災害ミュージアムの現場に直接携わったり、研究してきた発表者から構成した。災害ミュージアムの設立や資料の収集のプロセス、展示、活用の段階で何が起きているのかについて議論したとき、そこには多くの問題点とともに、とりとめのない状況が次々と展開していることが明らかとなった。そこでこの分科会では、ミュージアムという公共的な場所において、さまざまなアクターが展開する多様な動きを描くことで、改めて災害ミュージアムについて考察する手がかりを提示することを目的とした。

災害ミュージアムは、数あるミュージアムのなかでも、負の記憶に関するミュージアムとして位置づけられる。それは、大量の死が生み出された出来事を記憶するべく設置されたミュージアムや記念施設を指し、災害ミュージアムは、自然災害に関する多様な一次資料を収集、保存するとともに、展示を通してそれを伝えるミュージアムと定義される。また、負の記憶に関することのため、展示される側への配慮が他のミュージアムよりも大きなウェイトを占めることになる。

そこで問題となるのが、記憶の継承の場としてのミュージアムのあり方である。これまでの災害ミュージアムに関する議論では主に、災害の記憶や経験といった個人的記憶をいかに集合的記憶に集約させるのかという問題、そして誰が展示される人なのかという当事者をめぐる問題に焦点が当てられてきた。

災害に関する展示の議論は、他のミュージアムに比べても、記憶という多様で曖昧なものを、いかに真実性をもって展示するかが問題となってきた。それはミュージアムが、公共的な場であるが故に、正しくあるべきだ、教育的でなければいけないという理念が大きく働いているからだといえる。しかし、きわめて個別的な経験である災害を、後世に伝えていく、教訓にするというプロセスには、被災者である人、そうでない人、災害が起こる前から潜在的に存在していた地域の抱える問題、行政的な環境、法律の規制や限界、果ては災害によってもうこの世にはいない人の存在など、多くのアクターが相互に影響しあう。公共性を持って、何かしらの目的を掲げてミュージアムがつけられたとしても、それが当初思い描いた姿になるとは限らず、またその活用のされ方、来館者や利用者の受け止め方によっても、さらにその意義や意味は再文脈化され、機能や役割を変化させていくといえる。

これらを踏まえて、本分科会では、いわゆるハコものとしてのミュージアムのかたちをとっていないものも含めて、災害の経験や思いを展示すること、継承していくことについて検討した。

当日のプログラムは以下のとおりである。なお発表者の所属は当時のものである。

日時：2017年5月28日（土）、9:30～11:55

場所：南山大学

プログラム：

宮脇千絵 (南山大学人類学研究所)

「趣旨説明」

阪本真由美 (名古屋大学減災連携研究センター)

「災害の記憶の装置としてのミュージアム」

田上繁 (神奈川大学日本常民文化研究所)

「東日本大震災による被災資料の救出活動と収蔵庫建設の取り組み—宮城県気仙沼市大島漁業協同組合資料の救出と保全—」

川島秀一 (東北大学)

「年中行事から考える博物館の災害展示」

呂怡屏 (総合研究大学院大学)

「文化復興の資源としての博物館の展示と収蔵—台湾の小林平埔族群博物館を中心に—」

内尾太一 (麗澤大学) コメント

吉田憲司 (国立民族学博物館) コメント

これを踏まえて、本論集において、阪本真由美は、阪神・淡路大震災後に設立された「人と防災未来センター」での展示経験から、個人的な災害の記憶が、ミュージアムへと集約されることでどのように集合化されるのかを検討し、災害ミュージアムにおける記憶の継承の可能性を示唆する。

田上繁は、神奈川大学常民文化研究所が、東日本大震災後に気仙沼市大島でおこなった資料レスキューとその収蔵庫の設立の経緯について詳細に報告するとともに、今後の課題についても明らかにする。

川島秀一は、気仙沼市のリアス・アーク美術館の震災展示経験に基づき、年間行事のなかに息づく災害に関する教えを検討し、当事者たちの「生きられる」記憶が、展示という「提示される」記憶へと移行する際の問題点を指摘し、さらに災害前の日常に目を向けることの重要性についても説く。

呂怡屏は、台湾を襲った地震と台風を契機としてミュージアムが設立されたプロセスと、それが台湾原住民のコミュニティ再建や文化復興の契機となったことを示し、災害ミュージアムが地域住民との協働という役割を果たす場となることを明らかにする。

7. まとめにかえて

災害復興のプロセスにおいて、災害の記憶や経験がどのように集約、一般化されるのか、そしてそれを誰がどのように担っていくのかを、各論考において考察しているが、ここではまとめにかえて、2点示しておきたい。

まず、災害というのは、もともとその地域や産業などが抱えていた問題を強調する作用を持つのだということである。濱田は、益子参考館にとって東日本大震災は、それ以前よりぼんやりとしたものとしてあった、ネットワークやコミュニティというものを、より自覚的にする契機であった(濱田 2018:65)とする。また加藤は、震災復興は直面する課題のなかでは非日常的な対応であるが、長い営みのなかでは常にその創意工夫が民

俗技術を発展させてきたと見ることもできよう（加藤 2018:69）と書く。災害は非常に大きなインパクトではあるが、被災地となる場所は常にゆるやかな動きや変化のなかにあり、災害によって突然新たな動きが生起するわけではなく、それまでも何らかのかたちで存在していたことが大きく注目され取り上げられる画期となるのである。言い換えると、災害によって外部との接続ができ、注目され、出入りする人が増えるなかで、従来からその地域や人々が抱えていた潜在的な問題が表面化するのである。不特定多数の人がその問題に対峙するとき、被災者とは誰か、復興の担い手は誰かといった当事者の問題は、ますます重要になろう。

災害以前からの連続性という点で、もうひとつ重要なのが、災害以前の日常の暮らしへの視点である。川島は、特にその重要性を説く。リアス・アーク美術館の震災展示が、別室の気仙沼地方の生活が感得できる常設展示と対となっていることを示し、震災によって、どのような価値ある日常性が失われたかという認識がなければ、震災の意味を語ることはできない（川島 2018:113）とする。ともすれば、震災後の変化や復興にばかり目を奪われがちになるが、そのような非日常が、どのような日常に対していかに非日常なのかを認識せずには、災害研究も復興事業も方向性を見誤るだろう。この点は、調査地においてある日突然、災害に巻き込まれる可能性のある人類学者の仕事の強みでもあるといえよう。

謝辞

本特集には参加されていないが貴重なご発表をいただいた各先生、コメンテーターを務めてくださった各先生、また各企画にご参加くださった方々、さまざまなかたちで助言をくださった方々に感謝申し上げます。最後に、公開シンポジウム「手しごとと復興」でコメンテーターを務め、2017年4月28日に帰天されたA.サガヤラージ先生に、本論集を捧げたい。

参考文献

スーザン・A・クレイン(編)

2009『ミュージアムと記憶－知識の集積／展示の構造学』伊藤博明(監訳)、ありな書房。

加藤幸治

2018「津波常襲地における技術の断絶と継承」『人類学研究所 研究論集』第4号:68-87。

川島秀一

2018「年中行事から考える災害展示」『人類学研究所 研究論集』第4号:113-125。

木村周平

2014「日常から見える「防災」－イスタンブルでの文化人類学的参与観察」『災害フィールドワーク論 (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ)』、pp.44-58、古今書院。

後藤明

2016「はじめに」『人類学研究所 研究論集』第3号:1-3。

阪本真由美・木村周平・松多信尚・松岡格・矢守克也

2009「地震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究—トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から—」『京都大学防災研究所年報』52B:181-194。

竹沢尚一郎(編)

2015『ミュージアムと負の記憶—戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂。

寺田匡宏

2015『『無名の死者』の捏造—阪神・淡路だいしんさいのメモリアル博物館における被災と復興像の演出の特徴』木部暢子(編)『災害に学ぶ—文化資源の保全と再生』、pp.63-115、勉誠出版。

濱田琢司

2018「新たな「場」をひらく—益子参考館と東日本大震災から—」『人類学研究所 研究論集』第4号:45-67。

宮脇千絵

2016a「分科会「東アジアにおける災害復興と人類学—地域・民俗・記憶—」実施報告」『人類学研究所 研究論集』第3号:225-226。

2016b「公開シンポジウム「手しごとと復興」実施報告」『人類学研究所 研究論集』第3号:227-228。

2016c「公開講演会「災害ミュージアム×防災地理学」実施報告」『人類学研究所 研究論集』第3号:229-230。

リアス・アーク美術館(編)

2015『リアス・アーク美術館常設展示図録 東日本大震災の記録と津波の災害史』リアス・アーク美術館。